View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

博士論文要約

荒木田麗女は擬古物語・歴史物語・連歌・随筆・紀行文・漢詩・和学等、様々な分野の文学活動を行い、多数の作品を残している。しかし、麗女に関する先行研究は歴史物語と擬古物語の分野に偏り、その文学活動の全貌は未だ明らかになっていない。そこで、これまで研究されて来なかった分野にも注目し、麗女の取り組んだ文学活動を網羅的に解明することによって、麗女の全体像を捉えることを目的とした。

「麗女の連歌文芸」と題した第一章では、麗女の連歌活動の全貌を解明することを目指した。第一節「麗女の連歌―『麗女独吟千句』を中心に―」では、『麗女独吟千句』の分析から、麗女の連歌の特色が高次元の典拠を踏まえる付合にあり、それを説明するために詳細な自注が付されていることを明らかにした。そして、従来物語作者と認識されていた麗女が、同時代には連歌作者として高く評価されていたことを指摘した。

第二節「女性連衆の連歌会への参加形態」では、麗女を例にとって、近世期における女性連歌師の、一座への参加形態を考察した。中世期の資料によると、中世の女房連歌師は連歌会において男性と同じ座を囲まず、少し離れた御簾の中に控え、女房が句を出す際には男性が取り次ぎをした。しかし、麗女の連歌作品や随筆等から、麗女は男性の連衆と同席し、他の連衆との間に「うすき隔て」を置いていたことが判明した。中世の女性連歌師と比べて、物理的距離においても連衆としての扱いにおいても、男性連衆に近づいていたことが窺える。

第三節「『麗女連歌発句評・麗女独吟百韻』について」では、麗女の指導者としての側面に注目した。麗女の連歌指導を記録する書、『麗女連歌発句評・麗女独吟百韻』を分析することで、麗女は古歌や物語等の古典知識と、抱負な連歌知識に基づいて批評を行っていたことを明らかにした。そして、女性連歌師の存在自体

稀であった近世期において、麗女が指導的立場を保持することができた理由は、麗女が連歌師に求められる古歌や古典文学に関する豊富な知識を有していたことにあったと指摘した。

「麗女の擬古物語」と題した第二章では、麗女の文学活動の中心と目される擬古物語について、『池の藻屑』、『五葉』を取り上げ、その特色を考察した。第一節「麗女の擬古物語執筆方法―『五葉』を中心に―」では、麗女の擬古物語の表現に注目し、初期の短編『五葉』が『宇津保物語』・『源氏物語』に大幅に依拠していることを明らかにした。また、麗女が古典文学の模倣から始めて擬古文体を身に着けて行ったという、擬古物語作者としての習練の過程を考察した。

第二節「歴史物語『池の藻屑』の特徴」では、麗女の代表作『池の藻屑』の特色について分析を行った。まず、『池の藻屑』の最も信頼性の高い本文は、神宮文庫所蔵の慶徳家雅清書本（請求記号：五門‐八四六）であることを確認した。さらに、麗女は『池の藻屑』において、武人を平安朝の貴族のように造形し、戦乱の描写を努めて避けるという手法によって、王朝物語風の情趣を纏った歴史物語を成立させていることを述べた。

第三節「『池の藻屑』の馬琴評―麗女と馬琴―」では、曲亭馬琴が小津桂窓宛書簡の中で『池の藻屑』の感想や麗女に対する評価を述べていることに着目し、馬琴の『池の藻屑』への評価を分析した。その結果、馬琴は北朝を正統とする『池の藻屑』の執筆姿勢を批判しながらも、女性が執筆した歴史物語であるという点に価値を感じ、珍重していたことが判明した。

「麗女と和学」と題した第三章では、麗女の和学者としての側面に注目し、同時代の和学者との交流関係から、麗女の和学者としての位置づけを考察した。第一節「麗女と宣長―『野中の清水』論争をめぐって―」

では、本居宣長と麗女との論争内容を分析し、論争の原因が、宣長は擬古物語執筆の際には上代文献のみに依拠すべきと考え、麗女は古代から後代に至るまで広範囲の文献に学ぶべきと考えていた点にあったことを解明した。

第二節「麗女と和学者―龍草廬・賀茂真淵との関係から―」では、麗女が京都伏見の漢学者龍草廬と親しく交流を持ち、草廬を師として『古今集』や和歌について学んでいたことを明らかにした。草廬は賀茂真淵に入門して和学を学んでいたため、麗女は草廬を通して真淵の門流に連なることが判明した。しかし、草廬も麗女も、真淵の『万葉集』を重視する学問体系に批判的であり、真淵の学風は受け継いでいないことが確認できた。

第三節「草廬の和学―『古今集』真名本の研究―」では、第二節を踏まえ、草廬の和学について考察した。草廬が『古今集』を全文漢字で表記した『古今和歌集真名本』について研究し、『古今集』は紀貫之によって撰進された当初は真名で書かれていたが、後世になって仮名に書き換えられたとの見解を有していたことを明らかにした。これは現代の『古今集』研究から見れば荒唐無稽な説であるが、近世における『古今集』研究の過程を知る上で興味深いものである。

「麗女の紀行文・漢詩」と題した第四章においては、紀行文『初午の日記』と『後午の日記』から読み取れる麗女の人的交流の分析と、ほとんど調査が及んでいない麗女の漢詩に関する考察を行った。第一節「麗女の人的交流圏―紀行文『初午の日記』・『後午の日記』から―」では、麗女の紀行文『初午の日記』と『後午の日記』の記述の分析によって、上方の漢詩人と親密な交友関係を有していたことを明らかにした。

次いで、第二節「漢詩人としての麗女」においては、麗女の漢詩の作風や同時代の評価について考察した。

麗女の漢詩は技巧的ではなく、内容が理解しやすいが、個性に乏しいことを確認した。そして同時代の漢詩人は、麗女を歴史物語作者として評価した上で、その漢詩にも興味を持つに至ったことが判明した。

第五章「荒木田麗女年譜稿」では、麗女の生涯と文学活動の全容を解明するために、些細な事項まで含めて年譜形式を用いて記した。

資料編では、第一章第一節で論じた『麗女独吟千句』の翻刻、第三章一節、二節で論じた『真字古今集をあげつろひし詞』の翻刻、及び従来散逸したと考えられていた擬古物語『をだまき』・『豊臣の辞・大江の賦』の翻刻と解説を掲げた。